



令和7年度 山梨県立富士河口湖高等学校 第2回学校運営協議会

日 時：令和7年9月30日（火）16:00～17:00
場 所：山梨県立富士河口湖高等学校 小会議室

（1） 第2回学校運営協議会次第

（司会 教頭）

- ① 開会の言葉（司会）
- ② 校長あいさつ
- ③ 会長あいさつ
- ④ 議事（議長 会長）
 1. 教育課程について（教務主任）
 2. 総合的な探究の時間について（研究主任）
 3. その他
- ⑤ 報告事項
 1. 令和7年度学校評価中間報告（教頭）
 2. その他
- ⑥ 学校運営協議会委員より
- ⑦ 閉会の言葉（司会）

※今後の予定

第3回 令和7年12月12日（金）次年度基本方針について

第4回 令和8年 2月12日（木）学校評価・次年度基本方針について

令和7年度第2回学校運営協議会会議録

令和7年9月30日(火)16:00~17:20

於：小会議室

① 開会の言葉（教頭）

② 校長あいさつ

③ 会長あいさつ

④ 議事（議長 小石川会長）

1. 教育課程について

教務主任より説明 はじめに在籍生徒数と職員数について説明。次に、教育課程の概要について話した。標準的なカリキュラムは、1コマ50分の授業を週に30コマ行うものである。

本校ではR6まで、全学年で週31コマを実施し、水曜日のみ7校時まで授業を行っていた。しかし、生徒の負担や教員の働き方改革の観点から、見直しが必要となった。

R7は3年生のみ週30コマの授業とし、金曜日は5校時で放課とした。6校時にあたる時間は「河高タイム」として自学自習に充て、進路探究などに活用している。

1年次は全員が共通の基礎科目を学習し、2年次から文科類型・理科類型に分かれて学ぶ。3年次は各自の進路希望に応じて選択科目を履修する。選択科目の中には、本校の生徒の実情に合わせた学校設定科目も含まれている。

（委員A） 生徒の定員は減っていくのか。今後生徒の定員が減ることにより、教員の定数も減になっていく。それを見越したうえでの教育課程の編成ということでのよいのか。

→R8の定員についてはまだ発表されていない。（後半の質問に対して）そうです。

（委員B） ここ数年の定員割れの状況について教えてほしい。

→R5・6の入学生は定員を満たしていた。R7は19名欠けている。

（委員C） 全県的にも少子化が進んでいる。前回の会議で話のあった部活動の顧問の問題などにも大きく影響している。10月中旬には中3生の進路希望調査の結果も公表されるのでそちらもご確認いただきたい。

（教頭より補足） 必修科目のことを説明。現行の教育課程でも大学入試への対応が万全とは言えない。学校設定科目も多くあるが、独自性はほとんどない。河高タイムは県内の全日制では本校だけの特色。今後も継続してご審議いただきたい。

→承認

2. 総合的な探究の時間について

研究主任より説明 本校では総合的な探究の時間をKIP（KAWAKO INSIGHT PROGRAM）と呼んでいる。活動計画は、1年次を「地域課題を知る」、2年次を「地域課題について考える」、3年次を「地域課題解決の手法を発信する」としている。

1年次は地域課題について多方面から講演を受け、関連する職業や生き方についても学ぶ。2年次は地域課題の改善・解決に向けたプランニングを行う。今年度からはテーマを4つに固定し、少人数グループで探究活動を実施している。将来的には、2年生の探究内容を下級生のグループが引き継ぐことや、1・2年生合同での探究活動につなげる予定である。

（委員D） この取り組みは何年前から行っているのか。

(委員E) 当時を知る者として答える。本校はH27にSGHアソシエイトに認定された際、国際化を意識し、総合的な学習の時間で地域探究を開始した。R元からは総合的な探究の時間となり、それに合わせて「KIP」と名付けられた。

(委員D) 地域に目を向けさせ、大学卒業後に地域で働く人材となってほしい。KIPの活動によって、どのくらいの割合の生徒が地元に戻ってきているのか。

→追跡調査は行っておらず、正確な数値は分からない。ただ、近年卒業生が小中学校の教員として採用されているとの報告が多く寄せられている。KIPの影響かは不明だが、市町村役場などにも採用されているようだ。

(委員E) 地域を学ぶことは永遠のテーマである。本校の卒業生も県庁や市町村役場の幹部として多数活躍している。地域や日本のことを学んだ上で国際化を進めてほしい。

→承認

⑤ 報告事項

1. 令和7年度学校評価について

教頭より報告 第1回学校運営協議会で承認された学校評価の重点目標に基づき、7月に教員・生徒・保護者を対象とした学校評価アンケートを実施した。

⑥ 学校運営協議会委員より

(委員F) この地域で育った人たちが、地域を発展させていく仕組みづくりが大切。中学校・高校・地域が協力していくことが必要。

(委員G) 魅力ある学校づくりを進めていくには教育課程の工夫が必要。地域の問題を自分事としてとらえ、課題意識から学ぶ意欲がうまれる。地域を学ぶことが国際化につながる。

(委員H) 国際化には英語教育も必要。学校が国際観光地にあるのでそういった特色が一番いい。総合的な探究の時間については、知って学んで発表するという流れはよいが、その後議論して意見を共有するというプロセスも必要ではないか。

(委員I) 特に具体的な意見はないが、今後も学校運営に携わっていききたい。

(委員J) 行政としてKIPに携わっている。ぜひその成果をフィードバックしてほしい。地元に戻った若者が働く場を行政の立場として働きかけなければいけない。

(委員K) 今年度郡内の学校がすべて定員を割っていると知りショックを受けた。「河高じゃなくちゃ」という特色が欲しい。船津の祭に1年生全員で協力するなど地元へのかかわりの中から特色が出るかもしれない。

(委員L) 地元の企業に勤務して、従業員には本校の卒業生が多くいる。在校生にも地域を盛り上げる人になってほしい。そのために貢献をしていきたい。

(委員M) 知り合いの人との話から2割位の人には地元に戻ってきていると感じる。一度外に出るとこの地域の良さが見えてくるのではないだろうか。

(委員N) 学校の現状がよく分かった。国の動向も見ながら今後本校がどうあるべきかを考えていかなければならない。新聞で卒業生が京大の学部長を務めているのを知った。生徒や保護者が河高生であることに誇りを持って、それらが相互に作用していい効果が生まれるように我々もしっかりと関わらなければならない。

⑦ 閉会の言葉（教頭）